

場の保証と待つこと

—精神分裂病の一症例を通して—

青山 宏*・青山 真美**・総田 純次***・小野 武也*
境 信哉*・村井 真由美*

Guaranteeing the Place and Waiting.

— A Case Report of a Schizophrenic Patient —

Hiroshi AOYAMA, OTR, M. S.*, Mami AOYAMA, OTR, M. S.**, Junji SOHDA, MD.***

Takeya ONO, RPT, M. S.*, Shinya SAKAI, OTR*, Mayumi MURAI, OTR*

Abstract : The function of the Psychiatric Day Care have the two faces :

- 1) active interventions through structured programs.
- 2) non-invasive “holding” through the offer and guarantee of a safe place which supports voluntary development of patients.

Here we report a treatment course of a case of a schizophrenic patient, male 26 y.o. In this case active intervention had rather brought his withdrawal, while restrained commitments via offering the safe place enabled him to participate the suitable activity and finally to achieve a occupation. The attitude of the staffs to wait his voluntary change through the offer and guarantee of the place is considered to facilitate here his development by 1) restraint of direct invasion to the pathology of his weekend ego, 2) allowing his trial and error, which means for him the experience being accepted.

Key Words : Psychiatric Day Care, Schizophrenia, Place, Waiting

はじめに

精神科デイケアは、精神障害に対するリハビリテーション資源の一つとして定着してきている。その機能の一つには、デイケアを利用している各メンバー間や利用メンバーと治療スタッフ間の集団力動などの活用によるチームアプローチや生活技能訓練などに代表される構造化されたプログラ

ムを通して行われる積極的な治療的機能がある。一方、安心できる場の提供や保証を通して自己成長を待つという、非積極的な機能も併せ持っている。この両者の機能が、相補的に働きながらデイケアの治療は展開されて行くといえる。一般に、デイケアの治療構造を構成する要素には、精神科における作業療法の治療構造を構成する要素¹⁾と同様に、主体としての対象者、作業活動、医療スタッフ、集団、場所と場、時間といった構成要素が考えられる。しかし、外来治療であり、複数の職種が複数の対象者に関わる事が求められているデイケア²⁾では、特に、主体としての対象者、集団、場といった要素と、それに関わろうとするチームとしての医療スタッフが重要となってくる。今回、医療スタッフの積極的関わりにより、引きこもりを招き、場の提供と保証および集団を利用

* 山形県立保健医療短期大学
〒990-2212 山形市上柳 260 番地
Tel/Fax023-686-6649
Yamagata School of Health Science
260, Kamiyanagi, Yamagata, 990-2212, Japan

** 東北大学医学系研究科
Tohoku University School of Medicine, 2-1,
Seiryu-chou, Aoba-ku, Sendai 980-8575, Japan

*** 京都大学人間・環境学研究科
Kyoto University

表1 関わりの経過

期 間	参 加 頻 度	スタッフの対応	症 例 の 反 応
第1期 (4ヶ月)	週2日→週0-1日	<ul style="list-style-type: none"> 積極的に個別対応を行う。 プログラム参加を勧める。 苦手なことも頑張れ。 	<ul style="list-style-type: none"> 苦手な活動への参加を嫌がる。 病院へ来ても病棟へ逃げ込む。 スタッフを避ける。
第2期 (2年3ヶ月)	週1-2日(ほぼ定着) 同好会は毎週参加	<ul style="list-style-type: none"> 得意種目のみの参加を認める。 スポーツプログラムでは世話を任せる。 場の提供を中心に。 同好会にさりげなく勧誘。 	<ul style="list-style-type: none"> スポーツは楽しそうに活動。 スポーツ用具の係りなどはきっちり行う。 同好会への参加を開始。
第3期 (1年6ヶ月)	週2-3日(定期化) 同好会は毎週参加	<ul style="list-style-type: none"> 同好会での努力を積極的に評価。 症例から働きかけがあれば対応できる準備。 同好会では好敵手となれるよう競い合う。 	<ul style="list-style-type: none"> 同好会では苦手なサーブ練習を黙々行う。 他のプログラムにも参加が見られるようになる。 スタッフに自ら声かけしてくるようになる。
第4期 (1年)	週2-3日(定期化) 同好会は毎週参加	<ul style="list-style-type: none"> 同好会のリーダーを任せる。 大会参加、体育館借用など対外的手続きをレクチャー。 	<ul style="list-style-type: none"> 同好会のリーダー役として会をまとめる。 定時プログラムへも参加するようになる。 バドミントンの市民大会準優勝。 自ら仕事探しをはじめ。

しながら自己成長を待つことに関わりを絞り込むことにより就労を果たした男性分裂病の1症例を通して、場の保証と待つということについて考えてみたい。

デイケアの概要

都市郊外に位置する公立の総合病院に付設されたデイケアである。スタッフは兼務の医師、作業療法士、心理士、看護婦からなっている。医師、作業療法士は男性で、心理士、看護婦は女性である。活動は週4日で、1日平均10名程度の外来利用者と4名程度の院内利用者が参加している。利用者の年齢は、20歳代から40歳代までがほとんどをしめており、男女の比率は、6対4とほぼ同様である。活動内容は、スポーツ、創作活動、料理、園芸、小集団活動などの定時プログラムと週1回のプログラム時間外のバドミントン同好会活動からなっている。

症 例

男性、26歳(初診時)、無職

診断名：精神分裂病

家 族：父、母、弟(3歳年下)の4人家族

高等学校を卒業後、就労の話もあったが、本人は乗り気がせずブラブラして過ごしていた。その頃より、「他人がじろじろ見る。悪口を言う」などの被害的な訴えをするようになり、母親につれられ、神経科を外来受診した。一時、落ち着きを見

せ、時折アルバイトなどをしていたが再び不安定となり、単科の精神科病院に入院した。その後、同病院に1回(20歳時、3ヶ月間)、公立の総合病院の精神科病棟に2回の入院をした(22歳時、6ヶ月間および24歳時、7ヶ月間)。最終退院後も、日中は病院に来て開放病棟などで過ごすことが多かった。最終退院半年後にデイケアが開設されることになったため、「日常生活の規則化、就労意欲の向上」を目的としてデイケア通所が依頼された。

関わりの経過

症例との関わりの経過を表1に示した。治療スタッフは個別担当性をとらなかったが、病棟で卓球をする機会があったことなどから、男性スタッフである作業療法士が主に関わりを持つことになった。症例との関わりの経過を便宜的に4期に分けて振り返ってみる。

第1期：初めに主治医やスタッフから、生活リズムを改善したり対人関係の練習をするためというデイケアの目的を伝えた。だが、「人と話すのが苦手」と気乗りしない様子。家族の強い勧めもあってデイケア通所を開始したが、なかなか参加が定期化せず、週1回から2回程度の参加。創作的活動や小集団プログラムなどには参加しながら、スポーツだけには時折参加するなど興味を示した。スタッフが話しかけても言語化した答えができず、うなずくか首を振る程度の応答で、むしろ顔を赤らめて避けるようにすることが多い。このため、

定期的通所が定着するようにと治療者と1対1で行うプログラムの導入や心理士の定期面接を導入するなどスタッフからの関わりを強めた。症例の母親からも、デイケア参加を促して欲しいと頻回に連絡があった。しかし、参加の頻度はますます減少し、病院に来ても病棟で日中を過ごすことが多くなってきた。参加したくない理由についてもスタッフ、親にも話すことは無かった。

第2期：スタッフ間の打ち合わせでは、介入が早すぎる、過干渉な母親と同じスタンスを取りすぎているのではとの意見が出された。そのため、症例が安心して過ごせる場を提供し、保証することを主目的として再度デイケアの導入をはかることを確認した。その後、本人と話し合いを持ち、参加は興味のあるスポーツ中心で良いことを確認しあった。母親にもデイケア通所を無理に勧めないように連絡を取り、スタッフからの関わりも支持的な側面を中心とすることとした。同時に、他メンバーにも症例のプログラム参加の仕方について説明を行い同意を得た。以後、スポーツ中心の参加が半年あまり続いたが、次第に他メンバーからスポーツの技量が高いことを認められるようになり、症例も「スポーツをするとすっきりする」などと言語化ができるようになってきた。このため、スポーツ用具の準備やその日に行なうスポーツの種目を取りまとめるなどの役割を依頼したところ引き受け、以後症例の役割として定着した。また、プログラム時間外のバドミントン同好会活動にも、さりげなく勧誘したところ自ら顔を出すようになった。

第3期：バドミントン同好会では、「今までバドミントンをしたことが無かった」からと、サーブも満足に打てない状態が続いたが、本人はただ一人で壁打ちなどの練習を繰り返していた。同好会には休まず参加、次第に技量が向上するとともに同好会の中心メンバーとなってきた。症例も、「同好会の日が楽しみ」と話すようになった。また、他のメンバーからニックネームをつけられ嬉しそうな笑顔を見せるなどした。この頃より、苦手としてきた他の活動にも時折、顔を出すようになってきた。スタッフにも、声かけをしたり、試合をしようと誘うなど自ら働き掛けをする場面が見られるようになってきた。

第4期：デイケアの定時プログラムに定期的に

参加できるようになる。同時に、今まで苦手としていた活動にも参加できるようになった。バドミントン同好会活動では、リーダーとして認められるようになってきた。また、競技経験のある整形外科研修医の参加をきっかけに、同好会メンバーとバドミントンの市民大会への出場を目標に、同好会以外の日にも市民体育館で練習をすることを提案するなどする。その後、市民大会に参加することができた。一般2部で準優勝し、祝勝会では満面の笑顔を見せる。大会終了後、自ら求職活動を開始し、駐車場のガードマンとして就労を果たした。就労は3年以上続き、週一回の同好会への参加も続いた。

考 察

医療スタッフの積極的関わりにより、引きこもりを招き、場の提供と保証および集団を利用しながら自己成長を待つことに関わりを絞り込むことにより就労を果たした男性分裂病の症例の治療経過について報告した。本症例のデイケア参加当初は、デイケアの開設初期という時期にあっていた。そのため、スタッフはメンバーが定着するように積極的な関わりを持とうと考えた。特に、参加が定着しない本症例に対しては治療者と1対1で行うプログラムや心理士の定期面接を導入するなどスタッフからの積極的な関わりを強めた。本症例では、デイケア参加を強く促して欲しいと頻回に連絡をしてくる母親の存在もそれを後押ししていたきらいがある。自我の脆弱なメンバーや参加初期のメンバーにとっては、性急な関わりや関わりすぎるのが、むしろ治療的とならない³⁾ことはよく指摘されることである。それに対する配慮の足りない導入であったと考えられる。そのため、スタッフ間の話し合いで、関わり振り返りと見直しを行ない、症例が安心して過ごせる場の提供⁴⁾とその保証を主目的とすることを確認し、症例が興味を示すスポーツ活動への参加の定着を優先させることにした。これは、症例の病理に直接触れることなく、むしろ症例のもつ健康な側面を支持しながら健康な自己愛の充足の機会を提供することに結びついたと考えられる。

第2期では、スポーツプログラムへの参加が定着した。症例の興味のあるプログラムであり、なおかつ得意な活動だったこと。苦手な言語化を促

されることなく適応的なアクティングアウトが可能であるという活動の特性が、症例の持つ健康な側面を引き出し強化することに結びつくこととなったと考えられる。また、積極的には関わらないかわりに、常に関心を寄せながら程よい距離を保とうとするスタッフの働きかけが、単に場だけを提供するという枠付けのない対応とは違ふ、抱える⁵⁾ような枠組みとして作用したといえよう。場に馴染んだ頃を見計らって提示したスポーツ用具の準備や活動の種目決めという役割を引き受けたのも、そのような関わりの準備性があったからだと考えられる。同時に、スポーツという活動の持つ、共に活動をしながら役割をになうという対人的な要素も他のメンバーとの自然な交流を導く契機となったと思われる。

3期に入り、前期の終わり頃より参加を勧めたバドミントン同好会活動への参加も定着した。同好会活動は、プログラム時間外の活動という性質を持ち、本来のプログラムよりメンバー同士あるいはスタッフとインフォーマルな付き合いも要求される⁶⁾。そのような場への参加ができるようになった背景には、前期であるがままに受容された経験を通し、場に抱えられながら健康な自己愛を育てることができたからだと考えられる。そのような体験は同時に今まで消極的だった他のプログラム活動へも参加できるようになり、スタッフや他メンバーに自ら働きかけることができることに結びつく自信付けになったようである。また、スポーツが得意といった症例の特性も、苦手なバドミントンのサーブ練習を続けることを支え、技量が向上するにつれ他メンバーの賞賛という強化を得る事につながったと考えられる。

4期に入り、競技経験のある整形外科の研修医がバドミントン同好会に参加するようになった。このことは、今までいわば遊びとして行っていたバドミントンを競技として行うという新しい側面に目をむけさせるきっかけとなった。はじめはしり込みしていたメンバーも、精神医療と直接関係のない健康な他者としての研修医に後押しされる形で市民大会への参加という病院以外の現実的な場を目標にすることになった。すでに同好会のリーダー役となっていた症例は、研修医やケアスタッフの「皆で新しいことを経験してみよう。参加するだけですごくいいこと」という声かけと現実

的な手続きなどの具体的な指導を受け、リーダーとして役割をはたすことができた。同時に、大会において準優勝をするといった経験は、大きな強化刺激となり病者として閉ざされがちだった関心を、働くという外界の現実へと向ける契機となったと考えられる。この間の経過を通してえられた経験学習や自信は、幾分誇大になった可能性はあるものの、大会後自ら職場を探し就職することに結びついたといえよう。プログラム時間外の同好会への参加は、就職後も週1回続いている。同好会の存在は、就職した後も、症例にとっていつでも受け容れてもらえる馴染みの場として支持的な機能として働いていると考えられる。

まとめ

医療スタッフの積極的関わりにより、引きこもりを招き、場の保証と集団を利用しながら自己成長を待つことに関わりを絞り込むことにより就労を果たした男性分裂病の1症例の治療経過について報告した。積極的には関わらないものの、常に関心を寄せながら程よい距離を保って待つというスタッフの、いわば非積極的な働きかけが、時間はかかったが、直接病理に触れず、自己成長を促すことに結びついたと考えられる。場の提供と保証をするということは、対象者をほっておくという治療者側の責任逃れであってはならない。積極的に関心を持ちながら「待つ」という形のセットを行うことであり、時間を利用し⁷⁾自己成長の展開の機会をつくるという大切な下ごしらえをすることだと考えられる。また、本症例においては、スポーツの技量が高いといった特性により、活動内容も効果的に作用したものと考えられた。

本論文は第33回日本作業療法学会で発表したものに加筆したものである。

文 献

- 1) 山根寛：精神障害と作業療法。三輪書店，東京，1997。
- 2) 浅野弘毅：精神科デイケアの実践的研究。岩崎学術出版，東京，1996。
- 3) 山根寛：「ふれない」ことの治療的意味。作業療法，16(5)360-367, 1997。
- 4) 山根寛：パラレルな場（トポス）の利用。作業療法，16(5)，118-125, 1997。

- 5) Winnicott DW: Playing and reality. 橋本訳: 遊ぶことと現実. 岩崎学術出版社, 東京, 1991.
- 6) 青山宏: 精神科デイケアにおけるチームワークについて. 作業療法ジャーナル, 27, 258-261. 1993.
- 7) Meyer A: The Philosophy of Occupation Therapy. Archives of Occupational Therapy, 1-10, 1922. —1999.12.21. 受稿, 2000.1.19. 受理—

要 約

精神科デイケアの機能には、構造化されたプログラムの利用を通して働きかける積極的な治療機能がある。一方、安心できる場の提供や保証を通して自己成長を待つという、非積極的な機能も併せ持っている。スタッフの積極的関わりにより、引きこもりを招き、本人の興味のある活動への参加を主体とした、場の提供と保証に意識的に絞り込んだ対応をすることが就労に結びついた26歳の男性分裂病症例の治療経過を報告した。場の提供と保証を通しながら自己成長を待つという対応が、自我の脆弱な本症例にとって病理に直接触れられず、受容される体験の中で試行探索を行ないながら自己成長を遂げる契機になったと考えられた。

精神科デイケア, 精神分裂病, 場, 待つこと